萩原朔太郎の詩作における「音楽性」と意義
―前期詩集『月に吠える』『青猫』から晩年の『氷島』へ―
（ポスターセッション）

冨　永　ま　ゆ*

1. はじめに

萩原朔太郎は、近代詩における口語自由詩の形成・発展に大きくかかわった人物として名高い。中でも「詩」と「音楽」との関係について、自身の詩作に反映させるほか、詩論やエッセイ、アフォリズムで多く言及しており、彼が「詩」と「音楽」との関係性＝詩の「音楽性」を重要視していたことが窺える。

そして、朔太郎詩の「音楽性」については、現代の研究でも指摘されており、母音による押韻などの音素レベルに注目したものから、詩全体の構造と音楽の形式を照らし合わせたものまで、様々な角度から追究されてきた。しかし、音数律や母音の押韻、音楽的形式など、朔太郎が重視した詩の「音楽性」の要素ごとの研究はあるものの、それらを統括的に扱ったものは少なく、言及の余地があるのではないかと考えられる。

そこで、上記の問題意識をふまえ、朔太郎が口語自由詩を確立させた前期の詩作を対象に、「音楽性」の各要素の指摘、およびその「音楽性」の傾向を検討する。さらに、当時において朔太郎詩がどのような意義をもっていたのかを考察する。また、以上の考察をふまえ、晩年の詩集『氷島』に向けて、どのように研究を発展させていくかについて報告する。

＊お茶の水女子大学・院生

2. 研究方法・定義

まず、対象とする詩は、『月に吠える』から、「地面の底の病気の顔」、「竹」2篇、「殺人事件」、「およぐひと」、「猫」、「白い月」、「青樹の梢をあふぎて」の計8篇、『青猫』から、「薄暮の部屋」、「強い腕に抱かる」、「月夜」、「春の感情」、「恐ろしく憂鬱なる」、「黒い風琴」、「鶏」、「蒼ざめた馬」、「遺伝」、「艶めける霊魂」、「軍隊」の計11篇とする。これらは、これまでに「音楽性」が指摘されてきた、あるいは先行研究をもとに指摘しうると考えられるものから任意に選択した。

また、以上の計19篇について指摘する「音楽性」の要素は、先行研究や朔太郎の詩論等を参考に、聴覚的な要素から認知的（非聴覚）な要素まで、次の通り5つの項目に分類する。

a音…オノマトペ、リフレイン、音韻
bリズム・展開…連用中止法、文末表現、文語、口語
c連関・連想…イメージ連鎖、掛詞
d言語表記…文字種、漢語、和語
e構成と構造…対称性、記号、会話

以上の分類は、aからeにかけて、聴覚的から認知的（非聴覚）になっていくものである。この分類をもとに、『月に吠える』、『青猫』の詩19篇における「音楽性」を指摘し、朔太郎詩の「音楽性」を明らかにするものとする。この際、「音楽性」のカウント方法は、1篇の詩の中でどの「音楽性」

が用いられているかを数えるのであり、同詩内に同じ要素が複数個所で指摘できるとしても1とした。

なお、本稿における「音楽性」とは、単に言葉の意味に留まらない言葉の連想性を表すあらゆる要素の総称であり、これは朔太郎が「詩と音楽の関係」(『日本詩』第2巻第2号、アキラ書房、1935年4月号）で述べた、「最後に結論をあたへておかう。詩に於ける「音楽性」とは、詩の言葉がもつ聴覚美と、詩の表象する言葉の意味（イメーヂ、想念）とが、不離に有機的に化合した構成物を言ふのである」(『萩原朔太郎全集　補訂版』より参照）の解釈に拠るものである。

3. 研究結果・考察

先述した研究方法に則り分析した結果、『月に吠える』、『青猫』それぞれにおける詩の「音楽性」の要素の内訳は以下の通りとなった。

『月に吠える』

a…12（リフレイン：5、音韻：5、オノマトペ：2）

b…16（文末表現：4、連用中止法：3、漸層法：2、文語：2、口語：2、倒置法：1、体言止め：1、感嘆詞：1）

c…6（イメージ連鎖：6）

d…7（文字種：5、漢語：1、和語：1）

e…4（対称性：2、記号：1、会話：1）

『青猫』

a…20（リフレイン：9、オノマトペ：8、音韻：3）

b…29（文末表現：9、倒置法：5、列挙法：5、体言止め：3、漸層法：2、連用中止法：2、感嘆詞：1、文語：1、口語：1）

c…4（掛詞：2、イメージ連鎖：2）

d…9（文字種：6、漢語：2、和語：1）

e…12（記号：6、フーガ用法：2、字下げ：2、対称性：1、会話：1）

この結果をもとに、朔太郎詩の「音楽性」の傾向を検討すると、両詩集間の共通点と相違点が明らかになった。

まず、共通点として挙げられるのは、「聴覚的なものから認知的（非聴覚）なものまで幅広い「音楽性」が実践されている」、「口語自由詩という形式でありながら、口語・文語の「音楽性」を活かし、一要素として還元させている」という2点である。

一方、相違点として、『月に吠える』時点では、聴覚的な要素の傾向が強いのに対し、『青猫』ではそれに加えて認知的（非聴覚）な「音楽性」も顕著になっていることがわかる。また、『青猫』では、項目bにおいて、変化・アクセントを加える要素を用いる傾向も確認できた。さらに、詩1篇あたりの項目数が少なくなりながら、新たな「音楽性」の要素の使用も見受けられたことから、朔太郎の中で詩の「音楽性」の理解が進み、厳選した要素を利用していたと理解できよう。

以上をふまえると、詩の「音楽性」や口語・文語の「音楽性」の問題に対する朔太郎の積極性という一貫性と、その追究の中で自身の中の「音楽性」を確立していく変遷が見て取れるであろう。さらに、口語・文語の双方を「音楽性」という観点のもとで用いることで、当時における内面の発露を目的とした「言文一致的意義」に加え、口語・文語が「音楽性」の要素として効果的に用いることができるという「音楽的意義」をも、朔太郎の詩は持ち合わせているのだといえる。

4. 今後の展開

最後に、今後の研究の展開について述べる。これまでの考察を受けて、晩年の文語詩集『氷島』について考えると、単に当時の日本回帰的精神に

基づいて、晩年は文語へと回帰したのだとはいえまい。前期詩集からの流れをたどり、詩作全体を俯瞰することで、口語から文語への転換には朔太郎による詩の「音楽性」の追究が前提にあると考えられるのではないか。この考えは、朔太郎が「氷島の詩語に就いて」(『四季』第19号、四季社、1936年7月号)で述べている「『氷島』の詩を書く場合、僕には文章語が全く必然の詩語であった。換言すれば、文章語以外の他の言葉では、あの詩集の情操を表現することが不可能だった」(『萩原朔太郎全集　補訂版』より参照)との言葉からも裏付けられる。

また、安智史が「しかし、では具体的に、どこにどのようなかたちで「インナアリズム」は存在しているのか。一方で(中略)「自由詩のリズムに就て」中の言葉をつかえば〈詩全体から直覚的に感じられる所の「気分としての音楽」〉までも論じようとする志向を朔太郎が有する以上、(中略)機械的に分析・記述しうるものではなかったのである」(『萩原朔太郎というメディア――ひき裂かれる近代／詩人』より参照)と述べていることを受け、朔太郎の詩観を理論と実作の両側から検討することで、理論の実践を確認するとともに、実作を通じて理論の解釈を深めることが期待できる。

以上を今後の研究の展開とし、さらなる追求に努めていきたい。

【主要参考文献】

《本文引用》
萩原朔太郎『月に吠える』(感情詩社・白日社、1917年2月)
萩原朔太郎『青猫』(新潮社、1923年1月)
『萩原朔太郎全集 補訂版』全16冊(筑摩書房、1986年10月～1989年2月)

《辞典類》
安藤元雄・大岡信・中村稔監修『現代詩大事典』(三省堂、2008年2月)

《単行本》
『日本の詩歌14 萩原朔太郎』(中央公論社、1975年1月)
川原繁人『「あ」は「い」より大きい！？――音象徴で学ぶ音声学入門』(ひつじ書房、2017年11月)
菅谷規矩雄『詩的リズム――音数律に関するノート』(大和書房、1975年6月)
同『詩的リズム・続篇――音数律に関するノート――』(大和書房、1978年3月)
坪井秀人『萩原朔太郎論《詩》をひらく』(和泉書院、1989年4月)
那珂太郎『萩原朔太郎その他』(小澤書店、1975年4月)
浜野祥子『日本語のオノマトペ――音象徴と構造――』(くろしお出版、2014年7月)
安智史『萩原朔太郎というメディア――ひき裂かれる近代／詩人』(森話社、2008年)

《単行本所収論文》
大塚常樹「新体詩の解体・口語自由詩と《詩》の危機」(『詩う作家たち』、至文堂、1997年4月)
大塚常樹「詩学・詩法」(『日本近代文学研究の方法』、ひつじ書房、2016年11月)

《雑誌掲載論文》
島野尚子「萩原朔太郎詩の音楽性――作品構造の解明を通して――」(『早稲田大学国語教育研究』第18巻、早稲田大学国語教育学会、1998年3月号)
坪井秀人「『月に吠える』」(『国文学 解釈と鑑賞』第67巻8号、至文堂、2002年8月号)
安川定男「萩原朔太郎における詩と音楽」(『国語と国文学』第52巻第1号、東京大学国語国文学会、1975年1月号)